

---

# 生の果て、願いの先

麻月鉦

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

生の果て、願いの先

### 【Nコード】

N8929X

### 【作者名】

麻月鉦

### 【あらすじ】

この世の者でない存在が見える者。  
生まれる前に死んだ者。  
妻子を残して死んだ者。  
学校に棲みつく毒舌な者。  
死者を唆し地獄に落とそうとする者。

平行線が重なり合って点を作る時、そこに彼らの物語が産まれる。

これは、死にながら生きる私と死ぬ前に生まれたあの子の話。

## 0 (前書き)

ねがい「ねがひ」【願い】

1 願うこと。また、その事柄。「を聞き入れる」「が届く」

2 手続きを踏んで願い出ること。また、その文書。「を出す」

「退職」

十 十 十

赤ん坊がいる。

何も無い空間の中。天国でも地獄でもない、定義の出来ない空間の中。

そこに一人の赤ん坊がいる。

生まれてくる前に死んでしまった命が。何も知らない無垢なる魂が。

突如一人の老人が現れた。黒で統一された服に身を包んだ彼は、赤ん坊を抱き上げ囁く。

「君は、生まれることが出来なかったのだね。でも生きたいと強く願ってしまった」

赤ん坊は声なき声を上げた。その意味は発している赤ん坊にすら分からない。何故なら、何の知識も思考力もないから。

その様子に、彼は再び言う。

「君に知恵を授けよう。思考する能力を与えて、それから決めるといい。このまま誰にも知られずに消滅するのか、または生を得る為に足掻くのか」

こうして、赤ん坊は余りある知識を得た。

そして願う

十 十 十

これは、園宮華と園宮つぼみのお話。

生への罪悪感を抱えて生きる妹と、生と幸せを欲した姉の、ある双子の物語。

あなたならどうしますか？  
自分のそっくりさんが目の前に現れたら

## 0 (後書き)

『生の果て、願いの先』はとある大先生に送る為に書いたものです。まあ結構自由です。wordにすると89ページ・約90000文字になりました。私にしては大長編です。しかも完結してます  
(笑)

暇潰しにしては長いかもしれませんが、最期までお付き合いいただければ幸いです。

## 1 - 1 (前書き)

ゆう れい「イウ」【幽霊】

- 1 死者のたましい。亡魂。
- 2 死後さまよっている霊魂。恨みや未練を訴えるために、この世に姿を現すとされるもの。亡霊。また、ばけもの。おばけ。「が 出る」「屋敷」
- 3 形式上では存在するように見せかけて、実際には存在しないもの。

十 十 十

私、園宮華は現在高校一年生。高校は、東京にある普通の公立高校、共学。

季節は冬。今年も残り少なく、風は冷たい。私は吹き荒ぶ風に舞う木の葉を、美術部の窓から眺めている。手にした絵筆に適当な絵の具をつけて紙の上に目的もなく塗りたくっていく。絵を描くというよりは子供のように絵の具を重ねて汚い色を作り出しているだけだ。何故そんなことをしているかというと、私が美術部なるものの部員だからであって。なら絵を描く気なんかないのに美術部に入った訳は大きく二つある。

一つは時間潰しと体裁の為。生徒の殆どは部活動に参加している。帰宅部なんてクラスに一人か二人しかいない。なるべく楽そうで、長続きする部活なら何でも良かったのだ。

なら何故美術部を選んだのかというと、それはとある先輩が関係している。

それは入学式から早数ヶ月が経った頃。私はそろそろ入る部活を決めなければと焦りを感じていた。小 学校の時から仲良しで親友の美知子は、既に運動系の部活にさっさと入ってしまった。置いてけぼりにされた私は、後を追って運動部に入る体力もなく、かといって特に入りたい部活があるわけでもなく、仕方がないのでまだ辛うじて行っていた部活見学ツアーなるものに参加したのだ。その最後の見学先が美術部だった。ぺちゃくちゃお喋りしている者や黙々と絵を描いている生徒。その数は他の部より少ない。壁には部員や顧問の先生が画用紙に描いたらしき絵が洗濯バサミで釣り下げられている。それを眺めたところで絵に関して何の教養もない私がその良し悪しなんて分かる筈もなく、ただぼーっ、と部屋を見回して

いた。そして、彼を見つけた。

その男子学生は黙々と絵を描いている内の一人で、内履きの色からして二年生であることが分かった（この学校では内履きの色で学年を区別している）。その時の彼は、人と距離を置いて、広いキャンパスに絵を描いていた。やる気のなさそうな目、気だるそうな姿勢。およそ真剣に絵を描いているとは思えない態度で。しかし絵筆を動かすその手は忙しくなく、キビキビとしていた。その矛盾した姿勢と動きに、私は思わず釘付けになったのだ。描いているのは小さな花を抱えている長い黒髪の少女と柄の悪そうな少年。少年の表情はつつけんどんに見えてどこか優しげで、少女の方は幸せそうに微笑んでいる。描きあがったその絵を見て彼の目が満足そうに細められるのを見た時、私は思った。

知りたい。

この絵のこと、この人のことを。

もっともっともっと知りたい、と。そう望んでしまった。

同時に心の奥底で歯止めをかけてくる。

お前が何かを望むな、と声がかかる。

ならせめて、傍で見たい。彼を見て、私が見た情報だけで彼のことを知りたい。

それだけなら、許される気がして。

私はその日の内に、美術部に入部した。座る場所はいつも、先輩から少し距離を置いて、でも視界に入るような位置になるようにして。鉛筆を走らせる時に俯く顔や絵の具を選ぶ時の眼差しを、私は観察していた。知ったことと言えば、先輩は暖色より寒色、人物画より風景画が好きなこと（あの絵以外の人物画を、私は見たことがない）。友達はそう多い方ではなく、描いている絵はあまり人に見

せたがらないこと。夏休みに田舎へ旅行しに行ったこと（目的はわからなかったけれど）。そして、今のところ特定の女子と付き合っていないこと。

分かったのはそれだけ。会話すらまともにしたことはない。半年以上経つのに、一番知りたい先輩の名前を、私は未だに知らないまま。でも同時に知るのが怖くなる。これ以上、踏み込んでしまったら歯止めが利かなくなってしまうそう。だから、名前は知らないでおく。これが私の、唯一の枷。だから、彼のことを私は【先輩】と呼ぶ。親しみを込めて、境界線を引くつもりで。

でも他のことならいいかな、と思うので流れてくる会話を細々とキヤッチ、先輩の姿を盗み見る日々は続く。

変わることはない日々の生活。昨日を繰り返す今日、そして明日も繰り返す。これを平和と呼ぶならば、今日も一日平和なのだろう。私の一日は変わらない。学校へ行き、浅い友達付き合いをし、少ない昼食を親友の美知子と食べ、放課後は部活で先輩を眺め、それから、それから

先輩が俯いていた顔を上げた。今は風景画のデッサンをしていたらしい。私の視線に気付いたのだろうか。突然先輩と目が合ってしまったて……。そしてにっこり微笑まれてしまう。顔が赤くなった瞬間、今度は私が俯いた。意味不明な呻き声が洩れそうになるのを抑え、私はパレットの上に絵の具を滅茶苦茶に混ぜていく。呻き声の意味は、恥ずかしさからなのか、恐怖からなのか。

キーンコーンカーンコーン。聞き慣れた、ありきたりなチャイムの音がスピーカーから響く。下校終了時刻になった合図だ。私は立ち上がり、パレットを水道場で洗う。色がぼたぼたと垂れ流されていくのと水の冷たさで赤くなってしまいう手を見つめ、重い溜息を吐いた。早く、家に帰らなくちゃ。また怒られてしまう。他の部員ものろのろとした動作で片付けを始める。

鞆を肩に掛け、出入り口の扉を開けた。暖房が利いている室内と違い、外は寒そう。出る前に「お疲れさまでした……」蚊の鳴く

ような声で言った。それに返事をする人はいない。

「お疲れさま」と後ろから声がかかった。先輩が、私が此処にいるきっかけを作ったその人が、私の言葉に返事をくれた。それがどうしようもなく嬉しくて、でも恥ずかしくて、思わず外に飛び出してしまふ。正面から突然吹いた強い風が、私の頭を瞬間冷却する。冷静さを取り戻して、後悔が押し寄せてきた。ちゃんと顔を見ておけばよかった。また笑ってくれていたのかもしれないのに。それにあんなに急いで外に出て誤解をされてしまったかもしれない。もっとああしておけば、こうしておけば。

ゴウと唸る風で我に返った。大丈夫、まだ明日があるじゃない。今日と同じことを繰り返す明日が。私は向かい風に立ち向かうように歩き出した。

「うあ、寒い……」

校門前までの道のりで、私は一人呟く。それに周りの生徒は反応しない。いや、正しくは……。

『やあ、今日も一段と寒そうだねえ』

正しくは、【人間以外は】。

私の独り言に返事を返したのは一人の中年男だった。お世辞にも多いとは言えない髪を生やした頭、人当たりの良さそうな丸い顔。少し太めの体は社会人らしく着こなしたダークグレイのスーツ、くすんだ色をしている革靴。その足で、このオジサンは宙を歩いている。……そう、地を歩いているのではない。そもそも地に足が着いていないのだ。さらに肩や側頭部をよく見れば、赤い液体が染み付いているのが分かるだろう。それはオジサンが流した血だ。

『まったく、美知子達女子高生はどうして冬場なのにそんな短いスカートを履いているんだ。寒くはないのかい？ 華ちゃんのスカートも、ちょっと短くない？』

じろじろと足元を眺めてくるオジサン。決していやらしい意味は

なく、むしろ鬱陶しい。私は鞆から携帯電話を取り出した。ピンクのボディーは至るところに傷がついている。しかも契約は切れている為通話もメールも出来ない。カメラ機能と内蔵ゲームくらいしか使える機能がない、ガラクタ。校門から出て人が少なくなつた頃を見計らつて、それを耳に当てた。

「もう、学校では話しかけないし待ち伏せしないっていう約束だったでしょ？」

『幽霊になるとそれくらいしか楽しみがなくなつてねえ』

「何ジジ臭いこと言つてんのよ、もう」

オジサンはガハハと豪快に笑うだけだ。体についている血なんて気にも留めずに。まあ痛みなんて感じないだろう。それどころか空腹にもならないし睡眠だつて必要としないのだ。

だつてこの人は、死んでいるのだから。

私、園宮華はこの世の者でない者が見える。それは俗に言う【幽霊】というものだ。幽霊とは、死んだ人が成仏出来ずにこの世に留まり続ける魂のこと。何故成仏出来ないかという、この世に未練があるからでありました。つまり、やり残したことがあつて、それが心残りですにきれなかつたというわけ。で、私はその幽霊を見て、話しをしたりする事が出来るのだ。

このおかしな能力は、少なくとも幼稚園の時には無かつたと思う。多分小学校が上がつてからだ。しかもそれは何故か痛みの記憶と共にある。気付けば私は他の人には見えない者が見えるようになっていた。しかし、それを人に言つてもその人達は見えないので私は気味悪がられる一方で。それでも私は幽霊と平気で話しをしていたので【不気味な子】というレッテルを貼られ、クラスで孤立しかけたのが、小学三年生の頃。それ以来、私はこの能力を人前では絶対に見せないことを誓つた。ただ、自分一人の時には相変わらず幽霊とコミュニケーションを取つていたのだが。

この不思議な力が【霊能力】だと呼ばれることに気付いたのは最近のことだ。今、私の周りでこの能力を知る人間は一人もいないは

ずだ。一つ年上の兄は知っているだろうが、忘れていてくれることを願うばかりだ。

話を戻して、オジサンのこと。

名前は知っているけど私はこの人をオジサンと呼んでいる。親戚ではない。親友である美知子の、亡くなった父親だ。

オジサンは美知子が小学校に上がる前に家の近くで車に撥ねられて死んだらしい。交通事故だそうだ。しかし、可愛いざかりの娘がこの世に残してきてしまったことが余程心残りだったらしく、成仏出来ず、この世に留まってしまった。まさに死んでも死にきれなかったのだ、とオジサンは語る。

オジサンと出会ったのは小学五年生、私が能力を隠し始めて二年経ったある日のことだ。電柱に手向けられた花を見ていたら声をかけられた。最初にオジサンの姿を見ても、私は驚かなかった。もう見慣れていた存在だから。本人は駄目もとで私に呼びかけたのだが、私がそれに反応してしまったのをいいことに頼みごとをしてきたのだ。

それは自分の娘の様子を話して聞かせてくれというものだった。その当時、私達は同じクラスだったものの、お互い知り合いでもなければ共通の友人がいるわけでもない、赤の他人だったのだ。その人物を観察して報告してくれと頼まれた。最初は必死になって断ったのだが、オジサンはこれでもかと言うほどに拝み倒し、ずらずらと言葉を並べ立ててきた。

本当なら学校に通っている姿を自分の目でちゃんと確かめたいが、幽霊としての活動範囲内にその小学校は入っていない。これではこの世に未練を残したまま成仏出来やしない。自分の娘の花嫁姿を見るまでは成仏出来ない。後生だから、頼みを聞いてくれ。

最終的に空中で土下座までしかけたので、私は渋々その依頼を引き受けることにした。オジサンは泣きそうな顔で礼を言ったが、見ず知らずの人間を観察しなくてはならない私は別の意味で泣きそうだった。どうやって彼女と親しくなればよいのだろうか、というの

が一番の課題だった。が、その課題はどうかクリア出来た。記憶がおぼろげなのだが、彼女が一人で泣いていたところに私が居合わせってしまったのだと思う。それから美知子の悩みを聞いているうちに、いつの間にか仲良くなっていた。人と話すことが苦手な私の話を美知子は一生懸命聞いてくれ、美知子の悩みに私は無い知恵を働かせて出来る範囲で答えた。その相互関係は今でも続いている。でもそんな美知子にでさえ、私が霊能力者であること、ましてやオジサンが幽霊となって美知子を見守っていることは一切教えていない。そんなこと言ってもイタイ目で見られてしまうだけだから。

小学校卒業後、入学した先の中学校がオジサンの活動範囲内だったので二人＋一霊で行動することになった。しかし私や美知子に対する小言やうるさい説教が毎日のように続いたので、私はオジサンに校内出入り禁止を言い渡した。最初はぐちぐち言っていたものの、私はその道の人を呼んできて無理矢理成仏させるぞと脅したら大人しく引き下がった。それでもまだ未練たらしく学校の敷地内をうろついているあたり、執念深い。そりゃ幽霊にもなるわ。

私と美知子を挟んだオジサンとの関係は高校に上がってからも未だに続いている。ちなみにこの高校を選んだだけは通学に便利なことと、オジサンの活動範囲内にある為だ。

私は再び溜息を吐く。それは白い吐息となって宙に消えた。

『どうしたんだい、溜息なんか吐いて』溜息の原因が事も何気に訊ねてくる。

「幽霊の相手は疲れるなって思っただけよ」

『そんなことより早く報告報告』

わくわく、という感じでオジサンは肩を揺する。私の言葉は見事にスルーされてしまった。大人になるとスルー能力が高まるのか。何の参考にもならない。

携帯電話を耳に当てたまま、私は隣に浮かぶオジサンに今日の学校生活を報告する。しかし、携帯電話とは便利なものだ。一人で喋っているにも変な目で見られることはない。契約が切れていることさ

え知らなければ。

『今日も楽しそうで何よりだ』

報告後、オジサンは胡座を掻き、一人でうんうんと頷き、音もなく移動して私の横についてくる。呑気なものだ。最初の頃なんかはいつも死に疲れたような、全てのことにくたびれていた様子だったし、娘の近くににいるのに幽霊になった所為で触れることさえ出来ないと齒痒さ全開だったのに。今ではその時間に慣れてしまったのか幽霊でいることを楽しんでるようにさえ見える（この前なんか年甲斐もなく空中で三回転ほどしてみせた）。籠の中から飛び出した鳥のように、この世のしがらみから解放され、第二の生を満喫しているのだ。それが非常に羨ましく思える。私もあんな風に自由でいられたなら。

『おっと、もう此処まで来たのか』いつの間にかオジサンが巻き込まれた事故現場に辿り着いていた。私達はいつも此処で別れることにしている。その後オジサンがどうするのかは分からない。家に戻って眠れないまま朝を迎えるのか、夜の街を徘徊するのか。

『それじゃあ、また明日もよろしく頼むよ』

「それはいいけど、家まで迎えに来てくれるのは止めてくれない？」

『何を言っているんだ。君の無事な姿を見ないと安心出来ないよ』

「いつも無事よお」そうおどけてみせたがオジサンは厳しい口調で言い渡す。

『ともかく、顔だけは傷つけられないようにな。女の子なんだからオジサンはそう言って姿を消した。私は白い溜息を吐く。』

「顔以外ならいいっていうの？ ホント、幽霊って勝手ね」

一人で愚痴り、携帯電話を鞆の中に仕舞った。

空はすっかり暗くなっている。早く帰らないと。本当は帰りたくないけど。

重い足を引きずるようにして、私は家路を急いだ。

私が最初に挙げた部活動に入る理由の一つ、時間潰し。

それは、私の家庭事情にあった。

十  
十  
十

何の変哲もない、少し小さめの二階建ての我が家。通学時間はおよそ十分。美知子の家は此处から少し離れている。

家の前まで来て、携帯電話のディスプレイで時間を確認する。いつもの帰宅時刻より多少遅れてしまったものの、ギリギリ許容範囲だろうと私は踏んだ。そつと玄関の扉を開けて中に入る。同時に、何か割れる音と二つの怒声が聞こえた。どちらも既に聞き慣れているものだ。最初の音はたぶん、コップか何か割れたのだろう。私のマグカップでないことを祈るばかりだ。どちらにせよ後で片付けるのは私なのだが。二つの怒声のうち、一つは数日前に家出していた兄さんだろう。家出癖のある兄だったが、今回は帰ってくるのが早かった。もう一つは酔っぱらった父さん。いつの頃からか働かなくなった父さんは、いつも昼間から酒を呑んでいた。お陰で素面の時を拝める方が珍しい。

本当に、父さんはいつの間にか働きに出なくなっていた。家に入り浸るようになり、酒を呑んでは私達家族を殴る日々。一家の大黒柱が働かなくなってしまったので、今は母さんが幾つかの仕事を掛け持ち、兄さんがバイトをし、様々な保護を受けてどうにか私と兄を高校へ行かして細々と食い繋いでいるという状態だ。小・中学生は働くことは出来ないけど、高校生になった私は、自分も何かバイトをしたいと母さんに頼んでみた。が、きっぱりと却下された。前は家で大人しくしている、と言うのだ。それはつまり、早く家に帰って自分の分まで父さんに殴られている、と言っているようなもので。だから私は少しでも遅く家に帰る為の言い訳として部活動に入ったのだ。

「いい加減にしろこの糞親父！　いつまでニートなんざやってるつ

もりだ！？ 働かざるもの食うべからずって言葉も知らねえのか！  
「ガキが一丁前に親に向かって口出しするな！」

「今やっているのが親のやることか！ ならお前は親でも、ましてや大人でもねえっ」

「生意気を言うなあ！」

居間の前を通ろうとした私は、そこから響く怒号の応酬に「ひつ」と悲鳴をあげて、思わず足を止めてしまった。毎日繰り返されるやり取りに、私の心は慣れても体が慣れてくれない。いつもなら直ぐに立ち直って二階に駆け上がるのだが、今日は丁度居間の前で立ち止まってしまった。なんと運の悪いことだろうか。そして私の存在に気付いた父さんが突然居間の扉を叩き開けた。一瞬反応が遅れた私の顔に勢いのついた扉が直撃し、床に転倒。鞆が床の上を滑り、階段の手前で止まる。それを見届けたと同時に襟首を引っ掴まれて部屋の中に投げ込まれた。私の体は軽々と吹っ飛び、床に叩きつけら「華っ!？」寸前、私は兄さんの腕に受けとめられた。ナイスキヤッチ。その顔は殴られた痕があり、唇からは血が流れていた。父さんの顔も同じくらいの怪我を負っていた。ナイスファイト、とは褒めるわけにはいかない。

「てめえ……、華は関係ねえだろうが！」

兄さんがそう叫んで父さんに掴みかかった。そこから先はもう見たくなくて、私は目を背ける。その先に、砕け散ったガラスのコップが散乱していた。電球の光を受けて意味もなくキラキラと光っている。どうやら私の私物ではなさそうだったので一安心した。踏まないように気を付けなければ。

その間にも、父さんと兄さんの喧嘩（最早闘い）は続いている。骨と肉がぶつかり合う音、呻き声、くぐもった悲鳴、怒声。それに紛れて扉にぶつけた顔、というより頬が痛む音が聞こえてきそうだ。昨日はお腹を殴られたんだっけ。

ああ、昨日と何も変わっちゃいない。

昨日と変わらない今日は、平和？

ズキズキと頬が痛むので考えを放棄した。手で触ってみたが、少し腫れて熱を持っている。痣になりそうだ。あーあ。

しばらく乱闘の音を聞いていたら、バターンと何かが派手に倒れる音がした。それが試合終了のゴング。視線を二人へ向けると、床に倒れて大イビキをかいている父さんと、床に尻餅をつき、肩で息をしているに兄さんがいた。大抵この闘いは酔い潰れた父さんが眠るか兄さんが家を飛び出すかで決着がつく。ただし、私が家にいることが父さんに知られた場合、兄さんは逃げない。暴力のターゲットが私に変更されないように身代わりになっていてくれるのだ。それを再認識して私はどうしようもない無力感に襲われた。私が齒向かったところで半殺しの目に合うのが分かっているから反抗出来ない。父さんの次に力がある兄さんが、精一杯父さんに抵抗しているのだ。それがいつ終わるのかも分からずに。

「おい華、ぶつけたとこ大丈夫か？」

兄さんが首だけこちらへ回して訊ねた。私よりもボロボロのくせに。

「平気、そんなに酷くなかったから」

「ん、そうか……………」

腑に落ちない、というような顔をしている。私は兄さんの方が心配だ。しばらく痛みも腫れも引かないだろうに。

「兄さんこそ、大丈夫なの？」

「あー、明日学校で訊かれたら他高の奴と喧嘩してきたって答えるよ」

白い歯を剥き出して笑うその顔が痛々しくて、私はまた目を背けた。思わず溜息を吐く。私は、いつも目を背けてばかりだ。見たくないものから逃げている。自分でも分かっているけど、逃げ出さずにはいられないその弱さが、私は暴力的な父よりも嫌いだった。

「もうこんな時間か。二時間くらい喧嘩してたなあ」

兄さんは立ち上がって、「なんか作るよ、つつつてもカップ麺しかねえけど」と言つて唇の血を拭いた。

「何でもいいよ、私は」

「じゃあちよつと待つてろ。お湯沸かしてくる」

兄さんが台所へ立つている間、私は割れたガラスを袋に集めて縛った。ガシャガシャと耳障りな音が袋の中から洩れてくる。それを部屋の隅の方へ置いた。その近くに毛布が放置されていたので、それを眠っている父さんにかけてやる。

「ほつときゃいいじゃん、そんな奴」

台所から顔を覗かせた兄さんが唇を尖らしていた。私はただ曖昧に笑つて誤魔化す。暴力を振るう父さんは確かに怖くて嫌いだけれど、どうしても憎むことは出来なかった。それは血の繋がりが故なのか、それとも酔い潰れる父さんの顔が言い難い苦しみに耐えるように歪んでいるのを見ているからなのか。

玄関の扉が閉まる音が聞こえた。母さんが仕事から帰ってきたのだろう。静かに閉めたつもりなのだろうが、玄関に近い位置に立っていた私にはその音が聞こえた。開け放した居間の扉を、母さんがちらりと見やり、

「……………」

何も言わずに自分の部屋へ戻って行った。

母さんは、父さんの暴力が始まってからしばらくして、ご飯の支度をしてくれなくなった。それでも少しのお金だけは出してくれるので、朝は食パンを二枚食べて、昼は貰ったお金で購買から買い、夜は大体冷蔵庫にあるものかインスタント食品。自分はきつと、帰りにコンビニに寄つて何か買ってきてそれを部屋で食べているのだろう。私達の間も買ってきてくれないことは承知である。

今の生活は非常に苦しいもので、なのに父さんがその少ないお金をお酒に注ぎ込むものだから、私達の体は栄養が足りなくて痩せている。私と兄さんは、高校生なら普通に持つているであろう携帯電話も買ってもらえない。母さんは仕事の都合上持つてているが、それ

だって通話とメール機能しかない、シンプルで安いものだった。少し前までは私が持っている携帯電話を使っていたが、基本料金が高いということとで契約を切ったのだ。それを、私が貰った。母さんは何も言わず、それを放り投げたことを覚えている。

「華、出来たぞ。早く食おうぜ」

兄さんがカップ麺の容器をテーブルの上に置いていた。二人でいただきますをして、なるべく急いで食べる。食べている間に父さんが起きてしまうとまた取っ組み合いが始まりかねないからだ。さつさと食べ、さつさと片付け、さつさと寝て、さつさと学校へ行く。それが私達兄妹のスタイルだった。この家の生活は働かない父さんを中心として回っている。しかも、その中心を他の家族三人は避けて回っているのだ。

この中心のおかげで、私の人付き合いの幅は狭まった。自分の家に友達を招待出来ない言い訳を考えることの心苦しさ、他の家族と自分の家族の違い、みんながいつも小綺麗でお洒落な服を着ているのに対する劣等感、道を歩く家族の楽しそうな会話と家族揃って出掛けることすらなくなった私達。それらが、私とみんなとの間に大きな溝を作ってしまった。今でもそうだが学校では肩身の狭い思いをしている。だから私には友達と呼べる人間は殆どいない。

唯一付き合いを続けていてくれるのが美知子だった。美知子は私の家庭状況を知らない。もしかしたら自分から離れていってしまうのではないかと恐れて、話せずにいる。彼女は私が家に招待できない理由を聞かないし、私を誘って街に遊びに連れて行ったりしてくれる。勿論お金はないのでただ服や本屋を見て回ったりするだけ。それでも独りよりはずっとずっと楽しかった。この人なら大丈夫、と思える安心感があるのだ。人間でそれを感じられるのは親友の美知子と、いつも私を護ってくれる兄さんだけだった。この二人がいなかったら弱い私はとっくに死んでいただろう。そのくらい、今の生活は酷いものなのだ。

しかし、人間相手に教えられないことも幽霊相手には話せた。そ

れが美知子の亡き父オジサンと保健室のとある自縛霊である。人間にこの家庭事情を話すと、それはたちまち広がって誰の耳にも入っていく。世間でどういう扱いを受けるのかは分からないが、恐らくあまりいいことはないだろう。その点幽霊なら広まったとしてもこちらの世界に影響を受けることはない。だから安心して人には言えない悩みを打ち明けられるのだ。まあ頼りになるかどうかは別として。

とにかく、私に出来ることは現状がこれ以上悪化しないように維持するだけだ。そして今日は昨日を、明日は今日を繰り返す

「華、どうしたんだ？」

兄さんの声ではっと我に返った。向かいに座った兄さんが不安げな顔で私を見つめている。

「何が？」

「いや、あんま食べてないから」

容器の中には伸びかけた麺がまだ半分ほど残っていた。

「別になんでもないよ。ちょっと考え事してただけ」

「そうか、ならいい。早く食っちゃえよ」

「もうお腹いっぱい」

「まだ残ってるじゃねえか。ったく、俺が食ってやるからお前はもう寝ろ」

「片付け……」

「俺がやつとくから」

しっしつと私を手で追い払って、容器を引ったくつた。粗暴だけれど、それが優しさからくることを私は知っているから、ぎこちなく笑って「おやすみ」と言う。兄さんも微笑んで頷いた。

十 十 十

二階にある、狭いながらも立派な自分だけの部屋。置いてあるのはクローゼットと小さい机、蒲団だけ。漫画が部屋の隅に置いてあるが、これは美知子から借りたものだ。お小遣いを貰えない私は昼食代のお釣りをコツコツ貯めている。それは遊びで使うのではなく、大抵は勉強道具等に使われる。母さんが出してくれるのは昼食代だけで勉強に必要な道具は買ってくれない。たまに兄さんが要らないノートや消しゴムをくれたりするのだが、基本的には自分で貯めたお金で買っている。なるべく安いものを。

私は漫画の間に隠すように挟んであったノートを抜き取り、ペーヂを開く。日記帳だ。その日一日の内に起こった出来事を、なるべく詳しく書くようにしていた。もう何冊目になるかも分からない。美知子と出会った頃、彼女も日記をつけていることを知り、それに影響されて私も書き始めたのだ。当の本人は既に止めてしまっているが、私はずっと続いている。ノートは部屋のあちこちにまともらないようにして置いてある。一箇所に固めて置くと誰かに見られた時に一気に読まれ易いと思ったからだ。もともと、私の部屋に入っ

て搜索をする人なんていないと思うが。

日記につけることは大体決まっている。学校のこと、美知子のこと、部活のこと、先輩のこと、出会った幽霊との会話記録、父さんに振るわれた暴力の詳細、今日一日の感想。なるべく客観的に書くよう心がけたその日記の最後、一日の感想のフレーズは同じ。

明日も一日、笑って過ごせますように。

日記を元通りに仕舞って、寝巻きに着替える為にクローゼットを開けた。そこに並んでいる服も少ない。どれも着古したもののばかりで、流行りの服なんて入っていないかった。別に、それでもいいと思っっている。美知子は最近部活が忙しいのか、放課後にあまり出掛けなくなつたようだし。最も、夜にこっそり家を抜け出して遊んでいるのをオジサンに目撃されているが。まあ、私には関係のないことだ。放課後の自由さも、夜遊びも。

着替える為に服を脱いだ。私の体が鏡に映される。扉にぶつけた頬はやっぱり青くなっていた。範囲はそんなに広くないので大きな目元の絆創膏でも張っておけばいいか。ショートにした髪は染めてもいないのに痛んでしまっている。体つきはお世辞にもスマートとは言えない。同じ痩せていてもスマートとガリガリでは明らかに差がある。平均体重も余裕で下回っているのも当然だろう。一日に必要な栄養が充分に取れていないのだから。体育などで着替える時には、いつも制服の下に一枚シャツを着ていつて体の線を隠していた。足も筋肉なんかなく、骨と皮に近いものだ。既に骨と皮になりきっていないのは幸いである。身長も栄養が足りていないのか低い。一五〇センチに届くか届かないかぐらいだ。

自分の体を眺めて、重い溜息を吐いた。父さんから逃げて部屋に戻つたところで、自分の体を見るたびに現状を思い知らされる。こんな日々がいつまで続くのか。もしかしたら自分は一生この家に縛られて動けないままなのだろうか。父さんはお酒を呑み続け、兄さんは父さんと争い続けて、母さんはそれらを上手くかわして無視し、私は護られたり殴られたりするのを繰り返すのだろうか。

昨日を繰り返す今日は平和じゃない。地獄だ。それでも、これ以上悪くなるくらいだったら今を受け入れるしかない。

着替えて、もう一度鏡を見る。鏡の中の私はとても疲れた顔をしていた。駄目だ、こんな顔で朝を迎えちゃ。せめてぎこちなくとも笑顔で一日を終わらせよう。そう思っただけで笑ってみた。自分に向かつて微笑むその顔は、どこかおかしなものだった。私は上手に笑うこ

とすら出来ないのか、と卑屈になりかけたその時だった。

どこからか声が聞こえた。耳を澄ますと、それが笑い声なのだと分かった。が、それはどこか空虚なものだった。最初は小さかったその笑い声が、徐々に大きくなりだした。

くす……くす、

くす………

くすくすくすくす、

くすくすく

すくすくすくすくす……。

一つではなく複数というには足りない。それは無数の笑い声だった。私の部屋でそれは反響しあう。

「な、何？」部屋には私しかいないはずなのに、どうして笑い声なんか……。振り返っても辺りを見回しても人の姿はなかった。

背後で何かが割れる音がした。それは玄関で聞いたガラスの割れる音に似ている。鏡を見ていると、大きな亀裂が入っていた。砕けてはいないので破片は落ちていない。その鏡に映っていたのは、奇妙に笑んだ私の顔だった。

私、笑っているの？ そんなはずはない！

『 やつと、会えた

』

声が聞こえた。私とそっくりな、なのに感情のない無機質な声。鏡に映る歪んだ私が口を開いたのだ。勿論私は自分の口を動かしていない。なら、誰？

振り向いた先にいたのは、【私】だった。私と瓜二つの顔、高校の制服に包まれている痩せた体。しかし、そこに幾つか私と違うところがあった。まず今の私は制服を着ていない。更に言うと顔に先程出来たはずの痣が見当たらなかった。そして決定的な違いは、【

【私】の足が地に着いていない、つまり浮いているのだ。すなわち、目の前の【私】が人間ではなく、幽霊であることを意味していた。でもその幽霊が何故私とそっくりの姿で現れたのか分からない。悪戯目的にしても変な笑い声が聞こえたり、鏡を割ったりするのだろうか。

『何よ、そんな顔をして。せつかく死に別れた姉と再会出来たんだからもつと喜んだらどう？』

目の前の【私】が、私とは似ても似つかない笑みを浮かべてそう言った。

死に別れた姉。その言葉で、昔兄さんから聞いた話を思い出した。それは悲しい話。

「つぼみ、なの……？」声が震えているのが自分でも分かった。死んだはずの人間に会ったことが恐ろしいわけじゃない。そうじゃない、今私の前にいるその相手が、

『そう、わたしは園宮つぼみ。生まれる前に死んだ、双子の姉よ』

初めて会う姉の姿だったから。

これは、昨日の繰り返しの日

？

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8929x/>

---

生の果て、願いの先

2011年10月28日14時17分発行